

八 戦闘準備

大河内町での和田コーポレーションと連盟の騒動は、翌日の新聞やテレビなどで大々的に報道された。

事件の收拾をめぐる、和田コーポレーションは、記者会見を開き、世間を騒がせたと謝罪。しかし、出店計画の見直しはないとあらためて宣言した。

朝から新聞に目を通していた作蔵の顔色は、あまりさえなかった。

センチュリーWADAの強行的な出店は、これまでも、全国の各地で問題になるケースが多かったから、マスコミの論調は、比較的、反和田コーポレーションといった色彩が強かった。

にもかかわらず、大河内町においては、地元商店街にも問題があるという声が、多少なりとも上がっているのである。

それに、昨日の美雪のことがあった。

あんなふうには、親の身代わりとなって頭を下げにきた美雪を見たあとで、作蔵は、一方的にマスコミに腹を立てることは、できなくなっていた。

それは、健二にしても同じである。

いや、内藤家の人々みんなが、今までのような怒りを、和田コーポレーションに対して、ストレートにぶつけることができなくなっていた。

健二は、学校へ行くのがつらかった。こんなことは、今までになかった。

学校へ行けば、美雪と顔をあわせなければならない。その時、どんな言葉をかければいいのか、健二にはわからなかった。

もっとも、学校に行きづらいのは、健二よりも、むしろ美雪の方だろう。

美雪にとっては、クラスの全員が、立場の異なる敵のようなものである。もしも、昨日の騒ぎが話題に上ったら、美雪は、まわりからの集中砲火にさらされるに決まっている。

ところが、健二が教室に入ると、クラスの雰囲気は、いつもとまったく変わりがなかった。

美雪と若菜が、笑顔で会話をしている。そのまわりには、相変わらず女子の取り巻きができている。殺気立った様子など、少しもない。

弘樹は、額にはんそうこうをはりつけていたが、そのことを気にする者も、ひとりもいなかった。

「よお、健二。昨日は、大変だったな」

そう言って声をかけてきた一馬の顔にも、深刻なもの、何も見られない。

「あ？ああ・・・、なあ、なんかおかしくねえか？」

「おかしいって、何が？」

「だから、その、なんつか、美雪のやつが・・・」

健二は、そこまで言いかけて語尾をにごした。そのとたん、遠くからさげぶようにして、若菜の声がかかった。

「健二、今日、あんたが日直なんだから、先生のところに行かなきゃだめだよ」

毎度の若菜のおしかりに、女子の間からクスクスと笑い声がおこる。

「うるせえなあ、わかってるよ」

健二も、ぶっきらぼうに答えたものの、心の中で首をかしげざるをえなかった。

ふだんと変わらない若菜……。でも、昨夜は、健二の前で初めての涙を見せていた。

健二の中には、二人の若菜がいて、どうしても、その二人がひとつにまとまらない。

そして、同じことは、美雪についても言えた。昨日の思いつめた美雪と、今、教室で笑っている美雪のどちらが本物の彼女なのか、疑問はふくれ上がるばかりである。

「女って、わかんねえ」

健二は、目をパチクリさせている一馬に向かって、チツと舌打ちしてから教室を出た。

職員室で岡村先生から日直のノートを受け取った時、思いがけず、先生から声をかけられた。

「どうした？めずらしく、浮かない顔をしてるじゃないか？」

「ええ？まあ……」

「昨日の事件のことか？」

健二は、おどろいた。岡村先生が、人前でセンチリ―WADAの話を持ち出したのは、これが初めてだった。

「……そうか、上条が内藤のところへあやまりにきたか」

昨日からの流れを、ひと通り健二から説明されると、岡村先生は、考えごとをするような顔で言った。

「それにしても、今、聞いた様子だと、上条のことは心配なさそうだな。青嶋がついていれば、問題ないだろう」

「若菜がついていれば？という意味ですか？」

「青嶋が親しげに話しかける相手に、だれも、もんくは言わないだろうということさ。た

ぶん、青嶋は、それをわかってやっているんじゃないかな」

「若菜が、美雪を守っているということですか？」

「そういうことだ。上条があやまりにきたのを見て、青嶋は、自分が上条を助けなければと思ったんだろうな」

「……」

正直なところ、自分と同学年の若菜が、そこまで深く考え行動していることに、健二は、驚かされてしまった。

けれども、思い返してみれば、若菜は、昔からそうだった。恒子の時だって、若菜は、同じことをした。

（あいつは、そういうやつなんだよな……）

健二は、若菜のそうした弱い者を守ろうとする姿勢が好きだった。

そんな、強い若菜の見せた昨夜の涙。それを思い出すたびに、健二の胸は、チクリと痛

んだ。

（おれは、若菜を守りたいし、家族みんなを守りたい。一馬や弘樹、満久や恒子も守りたい。でも、美雪は、どうなんだろう？あいつにも、守りたい何かがあるんだろうか？）

健二には、美雪の本当の気持ちはわからなかった。ただ、これ以上、美雪と争う気には、とてもなれなかった。

もしかしたら、この時すでに、健二たち子供の世界では、すべての争いは終わっていたのかもしれない。

だが、大人の世界では、そうはならなかった。

連盟と和田コーポレーションの対決は、いよいよ、最終局面に入ろうとしていた。

和助の事件があったから九日後の九月二十四日、事態は次の段階に移った。今度は、和

田コーポレーションが、正式に工事の着工日を連盟に伝えてきたのである。

その間、県からは二度目の和解勧告が双方にあったが、話しあいは、平行線に終わった。

ここにいたって、全面対決は、完全に避けられないものとなった。

警察からは、会長の小林繁治のところへ、さらなる抗議行動をおこさないでほしいとの内々の要請があった。もし、前回ののような暴動に発展すれば、今度は、逮捕者が出ることになる。

それは、要請というより警告だった。連盟は、いよいよ最後の決断を迫られたのである。

「もはや、ここまでだ。和田コーポレーションは、確実に地盤を整えている。商工会も、

今となつては、まるで役に立たん。県も、センチュリーWADAの誘致に前向きな姿勢を示しておる」

和田コーポレーションからの通達を受けて開かれた連盟の会合で、繁治は、悲痛な告白をした。

この日の会合は、ことがあまりにも重大なため、男たちだけでなく、一部の女や子供まで会場に顔を出していた。

健二はもちろん、若菜や一馬といった、いつものメンバーもいる。キャンプの時に大乱闘となった、渡辺真行の顔も見えた。

しかし、だれもが沈痛な顔をして、発言をしようとはしない。

「それで、会長は、どうしたいのかね？」

沈黙を打ち破ったのは、いつものことで、この時も作威だった。繁治は、「うむ」と小さくうなずいて、再び語り出した。

「こうなったからには、われわれには、実力行使しか残されていないと思う。そもそも、センチュリーWADAの出店は、法的には、なんら問題のないことだ。そのまま放置しておけば、出店は、すんなりとできてしまう」

人々の間に、どよめきがおこった。

「実力行使と言うが、そんなことをしても、なんにもならないんじゃないのかね？ いたずらに、逮捕者を出すだけのような気がするが」

そんな声が、上がった。

「結局、われわれが敗北したということでしょう？どんなに、抗議してみても、どうにもならなかったというわけだ」

そんな声も、ささやかれた。

会場は、しだいに騒然となり、あきらめの空気がじわりと広がっていった。ふてくされたように、大きなため息をつく者まで現れた。

すると、たまりかねたように、和助がこぶしでテーブルをたたいて立ち上がった。

「なんじゃ、どいつもこいつも情けない！戦う前から、泣き言を言ってどうする！」

和助の激しい怒りに、場内がふたたび静まり返った。

「たしかに、法律では、勝ち目のない戦いかもしれん。現行の大店法では、センチリーWADAの進出を食い止めるのは不可能だ。だが、何もしないで負けを認めれば、わしらの商店街は、それこそ壊滅してしまうぞ！」

繁治は、和助の一括に援軍を得た思いで口を開いた。

「そのとおりだ。何もせずに終わるわけにはいかない。和田コーポレーションのやり方は、世論でも糾弾されている。その世論をさらに高めるだけでも、意味のあることなのではないか？われわれが動けば、マスコミが飛びつく。マスコミが飛びつければ、世論は左右される。どうせ負けるとわかっているとしても、これから先のことを考えれば、ここで、和田コーポレーションに一泡吹かせてやるのもよいのではないかと、わしは考えている。みんな、ど

うだろう?」

その時、会場の外から勢いよく入ってきた男がいる。大内英二。大河内町では、かなりの有名人と言ってよい。

大内は、大河内町漁業協同組合の組合長である。

今から三年前、大河内町では、防波堤建設をめぐる、県と漁協が激しく対立した事件があった。

海の荒くれ男たちによる抗議行動は、暴動となって世間の関心を集めたが、最後は機動隊に押さえこまれ失敗に終わった。

その荒くれ男たちを統率しているのが大内で、見た目も、まるで怒れるシャチのようである。

「漁協の組合長をします大内です。みんな、おれの顔は知つと思う。今回の騒動を見るにつけ、おれは、三年前のことが思い出されてならん!そこで、ここに集まった皆さんが立ち上がる気なら、おれたちも、応援したいと思う。まあ、たいした加勢はできないかもしれないが」

思いもよらない、援軍の登場だった。

しかし、これは、繁治や源三郎、作蔵といった連盟の役員たちが、事前に仕組んだものだった。繁治たちは、どうせ抗議行動を行なうなら、マスコミが飛びつきやすい派手なものにしようと、初めから計画していたのである。そこで、大内に援軍を頼んだ。

「大内さん、本当に恩に着るよ。実は、味方になってくれる者は、ほかにもいる。元、入ってこい」

繁治に催促されて会場に現れたのは、成瀬元という三十がらみの大男だった。短く切った髪を派手に脱色し、いかにもヤンキーといった風情である。

実はこの成瀬元は、繁治の甥で、若いながら成瀬運送という運送会社を営んでいた。大河内町の工業団地を主な取引先として、大型トラックを二十台以上も所有しているが、そこが繁治の目をつけた点だった。

「成瀬元と言います。おじさんが会長をしている、連盟の役に立てるならと思って、今夜は参加しました」

元は、それだけ言うと、ちらりと繁治の顔を見やった。これでいいのかい？という感じである。

「元は、運送業を営んでいて、大型トラックを動かすことができる。道を封鎖するには、これしかないと思う」

道を封鎖する？

話を聞いていただれもが、驚きの目をみはった。そして、即座に思った。会長は、本気だ。役員全員も、本気で最後の抗議行動に出ようとしている。

「これから、わしらがやろうとしていることは、尋常なことではない。だから、参加するか否かは、各々で決めてもらいたいです。わしらとて、こんな強硬な手段をとりたくは

なかった。しかし、現状を見て、やむをえないと判断したまでです」

今となつては、繁治はいつもの温厚な繁治ではなかった。援軍まで頼んで、勝ち目のない戦いに挑もうとしている。

会場は、異様な緊張感に包まれた。その中で、再び作蔵が口を開いた。

「わしは、会長といっしょに行動する。ここまで来たからには、最後までやらなけりや、気がすまん」

すると、すぐに義男も続いた。

「おやじがやるなら、おれもやるぞ。ナイトウ洋菓子店は、徹底的に戦うぞ」

健二は、日ごろ、決断力に欠けると思っていた父親が、勢いよくその場に立ち上がったのを見てびっくりした。

そして、内藤家の男たちを皮切りに、次々と「おれもやるぞ」という声が上がりはじめた。

健二も、立ち上がった。一馬も、立ち上がった。それから、若菜が、弘樹が、満久が、恒子が、迷うことなく立ち上がった。

最後に和助が立ち上がり、これで、会場の全員が、繁治の呼びかけに賛同を示した形となった。

繁治は、副会長の源三郎と顔を見あわせてから、感激した様子で言った。

「皆さん、ありがとうございます！これで、われわれ、大河内町の人間はひとつになった。

最後の最後まで、自分たちの町を守るために、戦おうではないか！」

おおおおっ！という、怒涛のような歓声と拍手がわきおこった。それから、ようやく、人々の顔に笑みがこぼれた。

その場は、直ちに重大な作戦会議となった。

繁治は、用意してあった大河内町の拡大地図を黒板にはりつけた。説明は、源三郎が行なった。

「まず、何からどうやってはじめるかだが、おぼけ工場に入ろうとする工事業者の阻止が、最初に必要になってくると思う。よって、われわれの主力は、まず、淀浜公園に集合し、そこから活動を開始したい。ただし、敵さんも、それは、承知しているはずだから、機動隊が正門をかためていると考えなきゃならん。そこで、どうするか？」

源三郎の問いかけに、作蔵が続けた。

「正門がだめなら、裏門がある。また、西門もある。正門がデモ隊との衝突で騒然となっていれば、業者も裏門や西門から入ることになるだろう。おそらく、やつらは、それを初めから見越しているにちがいない。正門の守りを固めて、わしらの注目をそちらに向けさせておきながら、その間に、ほかの門から業者を入れるのではないかということだ」

みんな、なるほどという顔でうなずきながら、作蔵たちの話に耳をかたむけている。再び、源三郎が口を開いた。

「だから、われわれも、その一歩先を考えるんだ。主力は、正門で抗議行動に移り、その

間に、裏門と西門に突入隊を配置する。業者が来るのを見計らって、われわれも、おぼけ工場の中になだれこみ、逆に門を閉めてしまえばいい。これは、迅速な行動が必要になるから、若い連中に頼まなければならない」

聞いていると、かなり本格的な作戦を、繁治たちは考えているらしい。

話は、さらに、元のトラック隊による道路の封鎖箇所と、英二の率いる漁協の船団の役割へと進み、そのあと、必要なものは何か？人員の配分はどのように行くか？など、具体的な内容の検討に入った。

ここから先は、主だったメンバーに任せることとし、一般の住民は解散した。健二たちも、役員のひとりである作蔵だけを残して家路に着いた。

会場を出てから、若菜とならんで路地を歩きはじめた時、うしろから渡辺貞行が追いかけてきた。

「ちょっと、待ってくれよ」

思いがけない相手から呼び止められて、健二は、いぶかしげにふり返った。

「あん？」

あれほどの大ゲンカをやった間柄だから、まだ、もんくがあるのかと思った。

ところが、貞行には、以前のようなとげとげしさはなかった。

「話しておきたいことがあってさ」

貞行は、少し緊張したように言った。

「上条のことで・・・」

「なんだよ？まだ、美雪にもんくがあるのかよ？」

「そうじゃねえよ。ただ、キャンプでのこと、あやまっておきたいんだ。あいつ、大熊のおっちゃんのところへも、わびに来たって聞いたから」

「あやまる？」

「なんか、このままじゃいやなんだよ。でも、なかなか、本人と話す機会がなくてさ。悪いけど、おまえから伝えてくれないか？」

健二は、まじまじと貞行の顔を見た。あまりにも意外な相手の言葉に、初めは、からかわれているのかと疑ったほどだった。

けれども、貞行は、ニコリともしないで健二の返事を待っている。本気なのだと、健二は思った。

「おまえ、当日は、どうするつもりなんだ？」

「今は、わからない。どうせ、オレにできることなんて何もないしね。まわりの大人たちに、ついていくしかないと思ってる」

「そっか。そうだよな・・・」

健二は、貞行の正直な言葉を聞いて、こいつも、大河内町のために、いっしょになって戦う仲間なのだとあらためて知った。そのとたん、ふっと肩の力が抜けた。

「しょうがねえなあ。わかったよ・・・」

健二は、言った。

「けど、美雪のやつが、おれの話をもとに聞いてくれるかどうかは、わからないぜ」

「それでもいいさ。どうせ、オレから言っても、聞いてもらえないだろうからな」

「けっ、おまえ、わかってんじゃねえか」

二人は、肩をすくめて苦笑いをした。

貞行の言葉を伝えた時、美雪は、なんて言うだろう？素直に喜ぶか、それとも、鼻でせ

せら笑うだろうか？

いずれにしても、これで、すっきりした気持ちのまま戦いにのぞめると、健二は思った。

ただし、自分たちの敵は、美雪ではなかった。だれかを悪者にして倒せばいいというな

ら話のかんたんだが、現実がちがう。

これから、健二たちが戦いを挑もうとしている相手は、和田コーポレーションというよ

りも、それを含め、自分たちの暮らしに暗い影を落としている、目に見えない何かだった。

「じゃあな。頼んだぞ」

貞行は、安心したように、駅前通りの方角へ馬の子のような勢いでかけていった。一度

だけふり返り、白い歯を見せながら、「おまえ、いきり立ちすぎて、ケガすんなよ」と健二

に言い残した。

「大きなお世話だ！」

健二も、鼻息を荒げて言い返してやった。

空を見上げると、まるい月が輝いている。もちつきをするウサギがはっきりと見える、
明るい月だった。

「まさか、あいつからあやまってくるとは思わなかったな」

健二が再び歩き出すと、となりにいた若菜は、うつむきかげんで「そうだね」と答えた。
ほんの少しだけ笑みを見せたが、あまり、うれしそうな様子でもなかった。

「おまえ、最近、元気がないな」

「・・・そんなことないよ。わたしは元気だよ」

「そうか？それなら、いいけど・・・」

なぜか、おたがいに言葉が続かない。

教室で大勢の前にいる時の若菜と、健二と二人だけにいる時の若菜は、やはり、別人の
ように思える。

「あ・・・」

何かを言いかけて顔を上げたが、すぐに言葉を飲みこんでしまった。そして、またうつ
むいた。くちびるを、真一文字にきゅっと閉じている。

「なんだよ。いつもみたいにはっきり言えよ」

健二は、言った。

「おまえが落ちこんでいると、おれの調子が出なくなるだろ？」

若菜は、再び顔を上げた。健二がニーツとやけて見せると、あっけにとられたように、

クスクスとふき出した。

「うん・・・」

青い月明かりに照らされた若菜の笑顔は、ただそれだけで、健二の心を和ませた。

これから、いよいよ、決戦の時を迎える。先の見えない未来への不安は、今夜の会合に参加した、すべての人に共通した思いだった。

健二も、不安を感じていた。ただ、ひとつだけはっきりと言えるのは、今の若菜の笑顔、自分は、いつまでも見ていたいということだった。

この町を守れば、若菜は、笑ってくれるはずだ。そう考えると、健二の胸には、いやが上にも熱い闘志がわき上がった。

若菜と別れ、家に戻った健二たちは、作蔵の帰りを待った。

今後、自分たちがしなければならぬことが何なのか、作蔵の指示に従えば、すべてがわかるはずだった。

ところが、夜遅く帰宅した作蔵は、まだ、横になろうとはしない内藤家の人々を前にして、意外なことを言った。

「当日、義男以外は、みんな家から出るな。これは、わしからの命令だ」

健二は、作蔵が何を言ってるのか理解できなかった。

今夜の会合で、あれほど組合員全員の気持ちがひとつになったというのに、抗議行動に参加してはいけないとは、どういうことなのか？

「じいちゃん、何言っただよ？そんなこと、できるわけないだろう？」

「なんで、できないんだ？当日は、店を開くわけにもいかない。家の中にこもって、おとなしくしているだけのことだ」

「そうじゃねえよ。みんなが戦おうとしている時に、どうして、おれたちだけが何もしないでいられるかって言っただよ」

こんなバカな話があるものかと、健二は思った。

鈴子と佐和子は、何も言わなかったが、健二と同じ気持ちであることは明らかだった。

作蔵たちだけを矢面に立たせるなんて、できるはずがなかった。

「今回ばかりは、ダメだ。だれかも言っておったが、いたずらに逮捕者を増やすだけの話だ。わしらだけでも、十分にやっていける。だから、みんなは、ここに残るんだ」

「だけどさあ・・・」

「いいや、ダメだと言ったら絶対にダメだ。いいな、健二。おまえがいたところで、何もできはせん。足手まといになるだけだ」

足手まといと言われて、さすがに健二は、むっとした。今まで、散々、自分の都合で周囲をふりまわしてきたくせに、今になっていらなと言われても、納得できるはずがない。

けれども、健二は、それ以上の口答えをしなかった。作蔵は、一度言い出したら、絶対に考えをひるがえさない男だからだ。

センチユリーWADAの工事開始予定は、四日後であった。それまでに、抗議行動に必

要なあらゆるものを用意しておかなければならない。垂れ幕やプラカードも必要だろう。食料も必要になるはずだ。

抗議行動がどんなものになるか、どのくらいの時間がかかるものか、結局は、やってみなければわからない。

健二は、憤りを感じる一方で、まだ、時間があるとひそかに思った。その間に、一馬たちと計画を練ることが出来る。だから、これ以上の口答えはひかえた。

作蔵からどんなにダメだと言われても、それを素直に受け入れるはずのない健二であった。

× × ×

翌日、学校は、例によっていつもどおりの学校だった。

美雪も変わらない。若菜も変わらない。大人たちの争いがうそのように、今日も、教室の中は平和そのものだ。

ところが、放課後になると、様子は一変した。

健二は、ひそかに一馬と弘樹、満久を体育館の裏に集めた。

どうやら、事情はどの家でも同じらしく、みんな、抗議行動の決行日は、家から出るなと厳命されているらしい。

学校は、危険を回避するために、同じ日の休校が各クラスの担任から伝えられた。

「さすがにうちのおやじも、いっしょについてくるなだつてさ。自分だけで行く気になつてる」

一馬が言えば、弘樹や満久もうなずいた。

「みんな、家族を危険に巻きこみたくないんだ。ぼくが父親だったら、同じことを言うと思う」

たしかに、弘樹の言うとおりかもしれない。

しかし、それならなおのこと、じっとしているわけにはいかない。もしも、作蔵たちに逮捕の危険が迫ったら、だれかが助けにいかねばならないのだ。

「おれは、とにかく、おばけ工場に入るつもりでいる。どさくさにまぎれば、行けると思う」

「もちろん、おれも行くぜ。健二だけに、いいカッコさせられねえからな」

一馬が、フンと鼻を鳴らして言った。

「ぼくも行くよ」

「うん、ぼくもだよ」

弘樹と満久も、あわてて言った。

「それに、わたしたちもね」

ふり返ると、この場に呼んでいなかった若菜と恒子が立っていた。

「わたしたちだけ、のけもの？ちょっと、ひどくない？」

若菜は、口で怒りながら目が笑っている。あちゃ〜という表情の健二たちに、若菜は続けて言った。

「わたしたち、きっと役に立つから。ね！いっしょにつれてってよ」

もう、しかたがなかった。

結局、若菜と恒子を加えたいつもの仲間六人は、力をあわせておばけ工場に潜入、自分たちの家族を守るために、戦うことを決意した。

そして、そんなふうに行動を開始したのは、健二たちだけではなかった。

鈴子や佐和子たち、それぞれの家の女たちも、大河内町役場の中で座りこみ運動に入ることを、男たちとは別に計画していた。

男たちのように過激な行動をとらなくても、訴えられることはある。町役場が、各家庭の主婦や娘たちに占拠されれば、報道は、ますます大々的なものになるはずだ。

こうして、それぞれがそれぞれの立場で、最後の抗議行動にのぞもうとしていた。

みんな、元気である。そして、意気盛んだった。

× × ×

当日の朝を迎えた内藤家の食卓は、いつも以上にぎやかだった。

これから挑む戦いを前に、健二は、全身にみなぎる力を感じた。作蔵と義男も、心なしか口数が多かった。

二人を家から送り出そうとした時、さすがに、鈴子と佐和子の顔は、こわばっていた。

健二も、言いようのない緊張感に包まれた。

外は、これからの波乱を予感させるかのような、くもり空である。しかも、強い風にあおられて、空全体が荒れている。

そこへ、ひとりの男が現れた。和助だった。

「和助・・・」

少し驚いた様子の作蔵に、和助は、ポーンと野球のボールを放った。

「作蔵。もう一度、二人で暴れるか！」

ニツと笑った和助の顔には、不敵なものがあった。それを受けて、作蔵の目にも燃え上がるような光が走った。

「おうよ。決勝戦、九回裏だな。行こう！」

二人のスーパーじじいの怒鳴っているような笑い声に、電線に止まっていたスズメたちが、いっせいに舞い上がった。

「気をつけて」

見送る佐和子の声が、心なしかふるえていた。健二の握られたこぶしにも、不必要に力が入った。

どこかで、かすかな雷鳴がとどろいた。後に「平成の港町戦争」と呼ばれることになる騒乱のはじまりだった。

